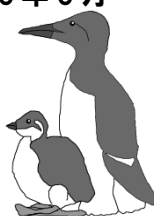


北の海鳥

十六号



『北の海鳥』十六号
令和5年3月13日
北海道海鳥保全研究会
天塩郡豊富町西3条5丁目



1 漂流物上で休息するコシジロアジサシ(厚内沖, 2022年8月11日) 城石一徹 撮影

目次

1. 北海道周辺の海鳥繁殖地

- 枝幸町目梨泊のウミネココロニーへ侵入する
哺乳類調査 大槻正遼 2
- サロベツ=パンケ沼のカワウ集団繁殖地 長谷部真 6

2. 北海道沖の海鳥

- 育雛中のウトウは、いつ、どこで、高く飛ぶか 大門純平 10
- 道東沖に晩夏を告げる
～分かってきたコシジロアジサシの出現状況～ 城石一徹 14

3. 海鳥情報

- 釧路市における海鳥類の観察記録③
カモメ類 矢萩 樹 18

1. 北海道周辺の海鳥繁殖地

枝幸町目梨泊のウミネココロニーへ
 侵入する哺乳類調査
 早稲田大学人間科学研究科 修士2年
 大槻 正遼

私は修士研究のため、2021年と2022年における春から夏の計8ヶ月間、北海道枝幸町目梨泊のウミネココロニーにて生態調査を行いました(図1)。私の研究テーマは当コロニーにやって来る哺乳類捕食者がウミネコにおよぼす影響を評価することです。ウミネコは現在個体数が激減しており、複数ある減少要因の1つとして哺乳類による捕食が挙げられています(富田ほか2016; Senzaki et al. 2019)。したがって本種の保全方策を構築する上で、哺乳類捕食者がウミネコにどのような悪影響をおよぼしているのかを知る必要があります。当コロニーでは、2017、2018年に在来種のキタキツネと外来種のアライグマの2種が侵入し、キタキツネはウミネコの卵と雛を、アライグマはウミネコの雛を捕食していることが既に明らかになっています(風間2019)。しかしアライグマとキタキツネがウミネコの成鳥を捕食しているのか、侵入・接近によりウミネコ親鳥の抱卵・抱雛中断が生じているのか、抱卵・抱雛中断が繁殖失敗(卵や雛の生残率低下)を引き起こしているのかは不明でした。そこで私は哺乳類の侵入状況把握のためのセンサーカメラ調査(風間2019)に加えて、コロニー内で踏査やウミネコの巣に向けて設置したセンサーカメラ調査を行いこれらの評価を試みました。

当コロニーでは哺乳類の侵入口となる場所に防除フェンスが設置されているものの、哺乳類はフェンスをうまく避けて容易に侵入していました(風間2019)。そこで

調査2年目の2022年には港湾管理者による補修作業が行われ、従来のように哺乳類が回り道してうまくコロニーへ侵入するのを防ぎました(図2)。



図1 枝幸町のウミネココロニー



図2 2022年に補修された哺乳類防除フェンス。画像奥にウミネココロニーが続く。

踏査よりイタドリが繁茂した視界の悪いエリアにおいて哺乳類が殺したと考えられるウミネコ成鳥が複数個体発見されました(図3)。なお、センサーカメラで哺乳類によるウミネコ成鳥の直接捕食シーンを撮影することはできませんでした。しかし、定期的に踏査を行う間にキタキツネまたはアライグマのどちらか一方のみが営巣地に侵入していた期間それぞれでウミネコ成鳥の死体が発見されたため、両種共にウミネコ成鳥を捕食したと考えられました。



図3 発見されたウミネコ成鳥死体

センサーカメラ調査から、ウミネコの卵の捕食は全てキタキツネによるもので、2021年はモニタリングした48卵のうち約70%を捕食しました。2022年は同じく44卵のうちキタキツネは約7%を捕食しました。キタキツネの1日あたりのコロニー侵入頻度が2022年よりも2021年の方が約5倍高かったため、結果的にキタキツネは2021年の方が区画あたり多くの卵を捕食したと考えられました。2022年は哺乳類の侵入防止効果の高いフェンスを設置し、キタキツネの侵入を防いだことが影響したものと考えられます。



図4 キタキツネによるウミネコ卵の持ち去り

キタキツネの卵捕食だけでなく高頻度のコロニー侵入により2021年は2022年の5倍以上の時間、ウミネコ親鳥は抱卵・抱雛を中断しました。抱卵・抱雛中断時間が長くなった2021年にはウミネコ親鳥

が夜間に卵を残したまま一度も帰巢せず、日の出に合わせて帰巢する事例が複数回観測されました。長時間のウミネコ親鳥の抱卵・抱雛中断にともなう弊害として、卵や雛が外気にさらされ、生残率に影響することがあげられますが（Emlen et al. 1966）、2021年の繁殖モニタリング調査において、胚発生が不完全なまま孵化し直後に死亡した雛が複数個体見つかりました。コロニー全体として2021年は全ての巣で産まれた卵や雛が生残することはありませんでした。キタキツネの侵入を防いだ2022年は約7割の巣で雛が巣立ちました。

海鳥では、ある捕食者の侵入により親鳥が抱卵を中断し卵が放置されると、その間に他の捕食者が誘引され捕食の危険が高まるとされます（Ellis et al. 2007）。当コロニーではアライグマの侵入にともなう親鳥の抱卵中断時に、ドブネズミによる卵の持ち去りが複数回観測されました（図5）。観測以後、捕獲罠をコロニーに設置したところ、ドブネズミを78匹（0.52匹/トラップ・ナイト）捕獲しました（図6）。また、育雛期後期にはアライグマが捕食したウミネコの雛の食べ残しをドブネズミがスカベンジングした映像が撮影されました（図7）。



図5 ドブネズミによるウミネコの卵の持ち去り



図6 捕獲されたドブネズミ

以上より、2021年はキタキツネによる卵捕食や抱卵・抱雛中断の影響が大きかったためコロニーが壊滅したと考えられました。一方、成鳥はキタキツネよりもアライグマによって高頻度に捕食されることがわかりました。海鳥は長命で繁殖速度が遅いため、親の死亡が個体数減少に大きく寄与します (Russell 1999)。アライグマはウミネコの成鳥を捕食することで長期的な個体数減少に寄与する可能性があります。アライグマは補修された防除フェンスもよじ登って侵入するため (図8)、今後はフェンスの改善が必要であると考えられます。

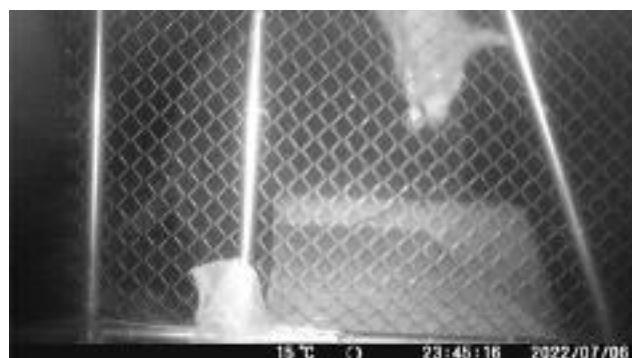


図8 フェンスをよじ登るアライグマ



図7 アライグマがウミネコの雛を捕食 (上)、その後ドブネズミがスカベンジング (下)。

ネズミ類は世界各地で海鳥の個体数減少に寄与しています (Dias et al. 2019)。本研究においてはドブネズミによるウミネコの卵捕食や雛のスカベンジングのデータが断片的でした。海外ではネズミが海鳥の成鳥を襲うことがあるとされています (Jones et al. 2019)。今後はドブネズミがウミネコへおよぼす影響についてもより詳しく調べる必要があると考えられます。

本研究を行うにあたり、早稲田大学人間科学部の風間健太郎准教授、中込大河氏、枝幸自然史調査室の村山良子氏、村山恵一郎氏、丹羽建設株式会社様、利尻自然史研究室の風間麻未氏をはじめとし、多くの方々にご協力いただきました。深く御礼申し上げます。また本研究は公益財団法人山階鳥類研究所の山階武彦助成事業の助成を受けて実施されました。

参考文献

- Dias MP, Martin R, Pearmain EJ, Burfield IJ, Small C, Phillips RA, Yates O, Lascelles B, Borboroglu PG, Croxall JP (2019) Threats to seabirds: A global assessment. *Biological Conservation*, 237: 525-537.
- Ellis KC, Shulman MJ, Jessop H, Suomala R, Morris SR, Seng V, Wagner M, Mach K (2007) Impact of raccoons on breeding success in large colonies of great black-backed gulls and herring gulls. *Waterbirds*, 30: 375-383.
- Jones CW, Risi MM, Cleeland J, Ryan PG (2019) First evidence of mouse attacks on adult albatrosses and petrels breeding on Sub-antarctic Marion and Gough Islands. *Polar Biology* 42: 619-623.
- Emlen JT, Jr, Miller DE, Evans RM, Thompson DH (1966) Predator-induced parental neglect in a Ring-billed Gull colony. *Auk*, 83: 677-679.
- 風間 健太郎 (2019) 枝幸町目梨泊のウミネコ調査. 北海道海鳥保全研究会会報 北の海鳥, 8: 2-5.
- Russell RW (1999) Comparative demography and life history tactics of seabirds: implications for conservation and marine monitoring. In: Musick JA (ed) *Life in the slow lane: ecology and conservation of long-lived marine animals*. American Fisheries Society, Bethesda, 51-76.
- Senzaki M, Terui A, Tomita N, Sato F, Fukuda Y, Kataoka Y, Watanuki Y (2019) Long-term declines in common breeding seabirds in Japan. *Bird Conservation International*, 1-13.
- 富田 直樹, 佐藤 文男, 岩見 恭子 (2016) 山形県飛島のウミネコ繁殖地のネコによる被害状況. *山階鳥類学雑誌*, 47: 123-129.

サロベツ=ペンケ沼のカワウ集団繁殖地

当会代表 長谷部真

幌延と猿払のカワウ繁殖地

2015年にサロベツに来てからはじめに目がついたのは、北海道最大でその年1,100 巣が確認された幌延の天塩川沿いのカワウの集団繁殖地でした（図1，大館・渡辺 2020）。天売島で海鳥調査していた自分としては、海鳥であるウの仲間と言えどもカワウは樹上で繁殖するため陸鳥の扱いでした。この年はその大きな繁殖地も途中で繁殖失敗していなくなってしまう、翌年の2016年も失敗し、アライグマの侵入により2017年には繁殖地自体がなくなっていました（大館・渡辺 2020）。繁殖地がなくなったとは言っても、天塩川下流域からカワウがいなくなった訳ではありません。その後も春から夏にかけて天塩川沿いの木で羽根を休めたり、上空をV字で編隊飛行するカワウの集団が普通に見られていました。幌延町に隣接する猿払村のキモマ沼周辺の林でもカワウの集団繁殖地を見つけたのですが、2016年に100羽、2017年に40巣程度を確認しただけでしたので、幌延の繁殖地と比べるべくもありません（図2）。そうとすれば幌延の集団繁殖地にたくさんいたカワウはどこで繁殖しているのでしょうか。



図1 幌延町のカワウ集団繁殖地（2015年5月18日）。この後、繁殖をやめた。



図2 猿払村のカワウの集団繁殖地（2016年7月6日）。アオサギも含む混成の繁殖地。

ペンケ沼のカワウ繁殖地

そんな中2016年にサロベツのペンケ沼でカワウ繁殖地を見つけました。ペンケ沼は1926年に上流に下エベコロベツ川が接続された結果、長年に渡り蓄積された堆積物の上にヤナギ林が形成され、半島状の鳥趾状三角州が形成されました。この型の三角州は河川からの土砂流入が多く、流出する水域の浸食がすくない場所（通常海の河口）に形成されます。この河畔林にカワウの繁殖地がいつしかできたようです（図3）。ペンケ沼はラムサール条約登録湿地の「サロベツ原野」に含まれ、道北最大のマガンとオオヒシクイの中継地であるため、モニタリングサイト1000でガンカモ調査が毎年実施されています。カワウの集団繁殖地は沼の東岸から調査をしていた際に発見しましたが、ヤナギ林の樹高がほぼ同じのため巣はほとんど見えませんでした。このため2016～2019年までに見える部分の10-40巣程度を数えたに過ぎませんでした（表1，長谷部 2022）。かといって周辺に高台はないため、繁殖地全体を見渡せる場所はありません。巣を数える他に考えられる方法は下エベコロベツ川にカヌーで入ることですが、その場合集団

繁殖地は大混乱に陥りますので、現実的な方法ではありません。

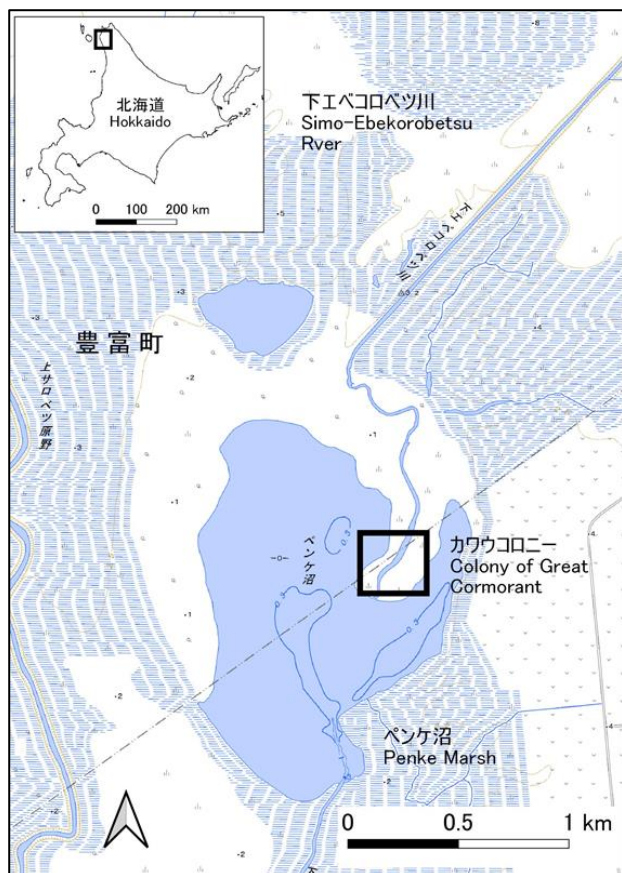


図3 ペンケ沼とカワウ集団繁殖地の位置

ドローンの練習

そこで登場したのがドローンです。それまで日本野鳥の会のチュウヒ調査でドローンを飛ばすところに同行した経験がありました。しかし、操作は難しいそうですし、自分達の団体に購入するとなると値段も高くなかなか手が出せませんでした。その頃NPO 法人バードリサーチがドローンを使ってガンカモ類を数え・種を認識するための研究をしていることを知りました。サロベツでもガンカモ調査に使いたいことをバードリサーチの神山和夫さんに相談したところ、ちょうど使っていない機材があるとのことでモニ1000調査という名目で貸してもらいました。自分で飛ばしたこともないので不安でしたが、神山さんは「慣れ

ればすぐにできる。保険にも入っているから落としても大丈夫。」ととても楽観的に考えてくれました。幸いドローンを飛ばす環境には恵まれていたので、回数をこなすことにより体で覚えることにしました。冬の気配が近づいてきた11月のサロベツでそばに教えてくれる人もいないまま、時々神山さんに電話相談しながら飛ばしても問題ない場所でドローンの練習が始まりました。離陸時に強風による機体の転倒、草原への着陸、飛行中のモニターのパックアウト、突然の降雨、前進が難しい程の強風、プロペラによる着ていたカップの破損、時間切れや飛行制限区域（ドローンメーカーによる自主規制）における強制降下など、墜落と行方不明を除く多くの事態を経験しました。始めのうちは短距離しか飛ばせませんでした。だんだん慣れてより長く、より遠くまで飛ばせるようになりました。多くの失敗を重ねながらも、ドローンを飛ばすことによって陸上からは得ることができない多くの情報を入手することができたので、ドローンを使って調査する価値は十分にありました。とは言っても冬は立ち止まってドローンのモニターを操作するにはあまりにも寒く、見えるものも少ないので春まで休止となりました。

ドローンによるカワウ繁殖地調査

待ちに待った2020年の春がやってきました。使ってみてその重要性が大きいことが明らかになったことから、所属している団体でもドローンも手に入れることができました。ドローンを使用する主な目的はペンケ沼のマガンやオオヒシクイの数を数えることでしたが、残念ながらこのマガンの警戒心は非常に強くドローン調査は向いていませんでした。ガンカモ類がほとんど不在の日中に飛ばしたドローンから沼のほとりにあるカワウの集団繁殖地がよく見

え、上空から見ると巣の配置や巣に座っている様子もはっきりわかりました。マガンとは異なり50mくらいの高さで飛行すればドローンをあまり気にしないようでした。ドローンを真上に飛ばし少しづつ動かしながら集団繁殖地全体を撮影しました。撮影した画像を画像編集ソフトで重ね合わせるにより339巣を数えました(表1)。ところで、この画像を見ながら数えるのが非常に手間です。AIで数える方法を開発したい気持ちがよくわかります。さて、巣立ち期に当たる8月1日にも集団繁殖地でカワウの姿を確認したため、多くのつがいの繁殖が成功したようでした。2021年、2022年も調査を継続したところ、2022年には628巣を数え、両年とも繁殖もうまく行っているようでした(表1, 図4, 図5)。アライグマの足跡をパンケ沼のほとりでも発見しましたが、集団繁殖地が壊滅した幌延のような大きな影響を受けていないようでした。パンケ沼にはオジロワシや近年ではわずかにオオワシも夏季に生息しています。大黒島や天売島ではオジロワシがウミウの巣を襲って繁殖に影響を与えていることが報告されていますが(橋本・綿貫2021, 大門2021)、パンケ沼の場合は今のところ大きな影響はないようです。



図4 パンケ沼に流れ込む下エベコロベツ川沿いのヤナギ林に形成されたカワウ集団繁殖地(2022年7月1日)。2020年と比較して左側の支流にも繁殖地が拡大した。



図5 パンケ沼カワウ集団繁殖地(2022年7月11日)。巣には大きくなったヒナがいた。

表1. 陸上からの観察またはドローン撮影によるパンケ沼におけるカワウの巣数(長谷部2022の2016-2021年までの結果に2022年の調査結果を追加)

| 年 | 月日 | 巣数 | 調査方法 |
|------|------|--------------|----------------|
| Year | date | No. of nests | Survey method |
| 2016 | 4/22 | 30 | 目視 Observation |
| 2017 | 4/17 | 40 | 目視 Observation |
| 2018 | 4/28 | 19 | 目視 Observation |
| 2019 | 4/20 | 20 | 目視 Observation |
| 2020 | 4/10 | 339 | ドローン Drone |
| 2021 | 4/13 | 543 | ドローン Drone |
| 2022 | 4/26 | 628 | ドローン Drone |

見えにくい場所におけるカワウの巣数がドローンにより数えられるようになったことは今まで目視が難しかった場所における巣数がわかるという点で画期的なことです。インターネットで検索してもドローンによるカワウの巣数調査の報告例が見つからなかったため、目視がしづらい場所でドローンを用いてカワウの巣数を数えることが有効であるという内容の論文をバードリサーチ誌に投稿しました。しかしながら、カワウは本州では内水面の魚類を食べてしまう

害鳥とされているようです。ドローンによって巣数を数えることよりも繁殖阻害などによる個体数管理に関心が向けられているようで、残念ながら投稿した論文は受理されませんでした。北海道では内水面漁業は盛んではなく、パンケ沼や周辺の内水面では漁業が行われていません。カワウはオホーツク海側の港の人工物で繁殖しているものの(渡辺 2020), それらの数も本州と比較すると多くないことから、これまでのところ漁業者との目立った軋轢も生じていないようです。

グーグルアースで 2015 年の衛星画像を確認すると、パンケ沼のカワウの集団繁殖地は現在のように集団繁殖地の部分の木がほとんど枯れていないので、それほど大きな繁殖地ではなかったと思われます。2018年の画像では多くの枯れ木が確認できるため、2017年の幌延の集団の繁殖地の崩壊と同時に急速に繁殖地が拡大してきたことが推察されます。幌延繁殖地崩壊の時期と一致しているため、幌延から移動してきた可能性も考えられます。幌延で2011年に確認された最大 1,650 巣には及ばないものの(大館・渡辺 2020), 巣数は増加傾向にありますので、今後幌延と同等の一大繁殖地になるかもしれません。

今後について

2018-2019年の猿払村のキモマ沼の集団繁殖地にカワウは不在だったと記憶しています。しかしグーグルアースで確認したところ、多くの枯れ木が陸上から見えにくい位置にありましたので、パンケ沼と同

様に見えない場所で実際は繁殖していた可能性もあります。ここ数年カワウの繁殖状況を確認していないので、今後ドローンを使用して再度確認してみる価値はあるでしょう。また、他の場所に新たな繁殖地が形成されている可能性もあるため、情報を収集しつつカワウの動きを今後も注視していきたいと思います。

ドローンは海鳥調査にも応用できると思います。ちょっと怖いですが海上に向かって飛ばしたこともありますので、いずれその報告もしたいと思います。また北海道海鳥保全研究会が立ち上がった際に数年に渡り行っていた礼文島でもドローンを使って海鳥調査を再開したいです。

引用文献

- 長谷部真. 2022. サロベツのパンケ沼におけるカワウの繁殖状況. 利尻研究 41:11-14.
- 橋本詩津久・綿貫豊. 2021. 天売島におけるオジロワシによる海鳥の捕食. 北の海鳥 13:10-13.
- 大館和広・渡辺義昭. 2020. 北海道幌延町カワウコロニーの営巣放棄とアライグマの影響. 利尻研究, (39):55-61.
- 大門純平. 2021. 北海道大黒島で観察されたオジロワシの海鳥に対する干渉・捕食. 北の海鳥 13:22-23.
- 渡辺義昭. 2020. 北海道オホーツク海沿岸における 2013 年の海鳥営巣数と 2014 年から 2019 年までのオオセグロカモメの営巣数増加. 利尻研究, 39:27-31.

2.北海道沖の海鳥

育雛中のウトウは、いつ、どこで、
高く飛ぶか

北海道大学水産科学院 大門純平
現所属：水産研究・教育機構

はじめに

近年、再生可能エネルギー産業として世界各地で洋上風力発電施設の建設が進んでいます。しかし、その存在が海洋生物におよぼす影響も多く指摘されており、海鳥の風車ブレードへの衝突死亡は大きな問題のひとつです。衝突リスクの高い高度は、風車のタイプによってさまざまですが、20–140 m がひとつの目安とされています。海鳥への影響を最小限にしながら建設を行うためには、「海鳥が、いつ、どこで、衝突リスクの高い高度を飛ぶのか」をあらかじめ知っておくことが重要です。

近年、北海道周辺では、洋上風力発電の建設計画があり、同海域で繁殖する海鳥の採食海域や飛翔高度の調査研究が進められています。その一環として、私たちは、天売島で育雛中のウトウに GPS ロガーを装着し、トリップ中の飛翔高度に関する報告を行いました (Okado & Watanuki 印刷中)。今回の記事では、その内容について簡単にご紹介したいと思います。

ウミスズメ科の飛翔高度

ウトウが属するウミスズメ科は、基本的に、高速で羽ばたきながら、海面近くを飛翔しており、20 m 以上の高さを飛ぶことはまれであると考えられています (たとえば Johnston et al. 2014)。しかし、海岸近くで繁殖地に入出入りするアメリカマダラウミスズメの飛翔高度をレーダーで調べた研究では、陸上から 100 m 近くもの高さを飛んでいたことが報告されています

(Sanzenbacher et al. 2014)。これは、ウミスズメ科でも時と場合によっては、高く飛ぶ場所があることを示唆します。たとえば、天売島では高度 100 m 以上の場所に営巣しているウトウが多くいます。これらの個体は繁殖地への出入りの際は、必ず 100 m 以上の高度を飛ぶでしょう。そこで、私たちは、採食トリップ中のウトウは、繁殖地への出入りの際に高く飛び、出入り以外の飛翔中は繁殖地付近であっても高く飛ばないだろうという予測を立て、検証しました。

GPS ロガーで飛翔高度を調べる

海鳥の飛翔高度は、古くから調べられています。最もよく使われてきた方法は、船上、もしくは陸上から、レーダー、目視、レーザー距離計などで飛翔個体の高度を直接測定する方法です。これらは、短い時間の調査で、さまざまな種類の個体の測定ができ、測定された高度の信頼性が高いというメリットがあります。しかし、調査できる時間帯や場所が限られている、ほとんどが 1 個体 1 回限りのデータである、といったデメリットもあります。

一方、最近は GPS ロガーを個体に装着し、個体の位置と飛翔高度の変化を連続的に追跡した研究も増えてきました。GPS というと、二次元的な位置 (緯度・経度) を知るためのツールというイメージが強いかもしれませんが、実際の測位の際には三次元的な位置 (緯度・経度・高度) が算出されており (詳しい仕組みの説明は省略します)、これを利用すれば、個体の飛翔高度がいつ、どこで変わるかを検証することが可能です。ただし、GPS による高度のデータは、緯度・経度に比べると推定精度が低いことに注意が必要です。今回使用した GPS ロガーで実験した場合、各測点の高度と実際の高度のずれは平均で±

21 m でした。すなわち、鳥が 1 m の高度を飛んでいても、ロガーの記録では -20 m-22 m の範囲の高度が記録されることが多く、ときにはその範囲外の高度が記録される場合もあるということです。つまり、ひとつひとつの測点の高度の推定精度は低く、各測点の高度をそのまま鵜呑みにすることはできません。そのため、本研究では、全個体の測点のデータを合わせて解析し、繁殖地からの距離に応じた「平均的な」高度変化の傾向を調べるということに焦点を当てています。

データ解析

本研究では、2018-2019 年の天売島で捕獲したウトウ 19 個体から得た 5 分間隔の GPS 追跡データを使いました (図 1)。これらの個体は、高度 120-130 m の場所に営巣しています。GPS データの解析では、ある測点から次の測点までの移動速度 (m s^{-1} : 直線距離 [m] / 経過時間 [s]) を算出し、その移動速度が 6 m s^{-1} 以上だ

った測点は「飛翔」、 6 m s^{-1} 未満だった測点は「着水」と定義しました。そこから、「飛翔」に分類された測点を、「帰巢中 (繁殖地に戻る直前の飛翔)」および「トリップ中」のフェーズに分け、各フェーズで繁殖地からの直線距離に応じた飛翔高度の変化を調べました。なお、今回は、記録間隔の問題で「出巢直後 (繁殖地から出た直後の飛翔)」フェーズの飛翔高度の変化は検証できませんでした。以上の解析は、すべてのトリップのデータをまとめて行っています。また、上述のように GPS の高度推定の誤差によって、「飛翔」に分類された測点でもマイナスの高度が記録されることがあります。しかし、今回の解析ではマイナスの高度が記録された測点も含めて解析を行っています。これは、マイナスの高度の測点を削除して平均的な飛翔高度を調べると、高度が過大評価されてしまう可能性があるためです。

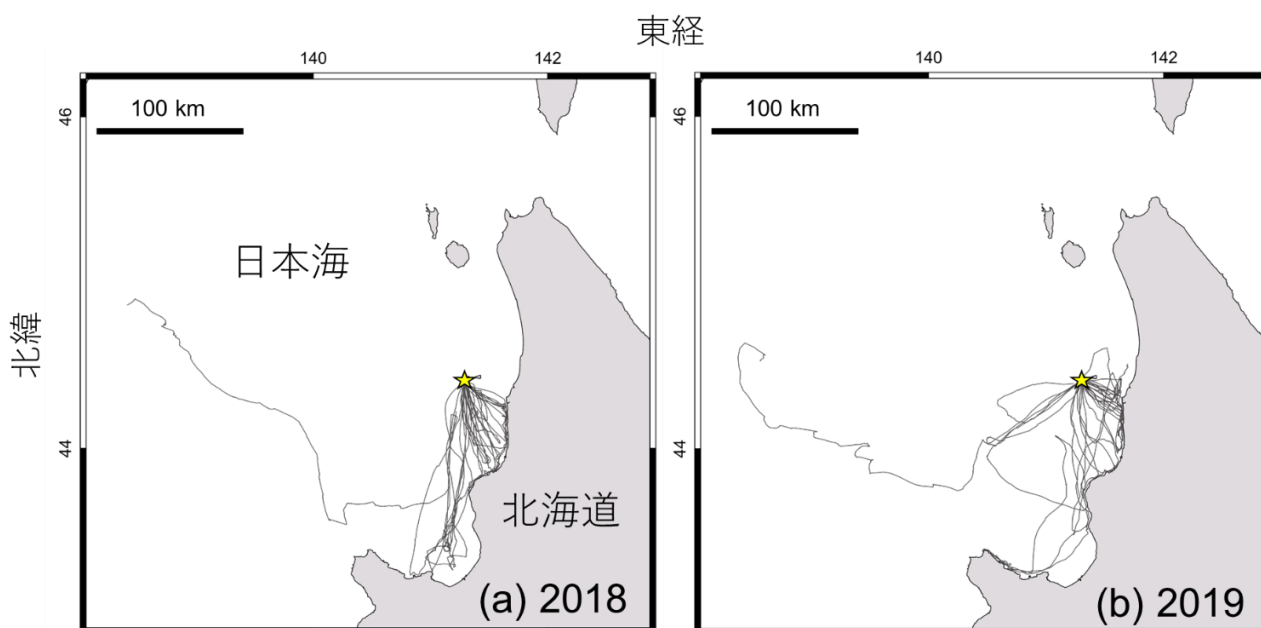


図 1. 天売島で育雛中のウトウの採食トリップの軌跡 (a: 2018 年, b: 2019 年)。星は天売島。GPS ロガーのバッテリー切れによって、繁殖地に戻る前に途切れた採食トリップも含む。

「トリップ中」「帰巢中」の飛翔高度

「トリップ中」のウトウは、基本的に繁殖地からの距離によらず、海面付近を飛ぶ確率が高いことがわかりました（図 2a）。ウミスズメ科では海上で 20 m より高く飛ぶ確率はきわめて低いと考えられてきましたが、これは限られた場所における一時的な観察によるものが主でした。一方、本研究によって、ウミスズメ科がトリップ中の全体を通して、基本的には海面付近を飛んでいることが示唆されました。

一方、「帰巢中」のウトウは、島から数キロ離れた場所から飛翔高度を上げる確率が高いことが示唆されました（図 2b）。これは、今回調べたウトウが営巣場所（120-130 m）の高度まで急激に上昇するというよりも、数キロかけて徐々に上昇している可能性を示します。鳥類の上昇

に関する理論的研究によると、同じ高度に達するまでのエネルギー消費量は、急激な上昇に比べ、ゆるやかな上昇の方が少ないと予測されています（Hendenstrom & Alerstam 1994）。確かに、自分が坂を上る場合でも、急な坂をのぼるよりは、ある程度ゆるやかな坂を上った方が楽です。つまり、繁殖地から数キロ離れた場所から高度が上がるのは、エネルギーを節約した上昇をしているためかもしれません。ただし、私は、すべての個体がゆるやかな上昇をするわけではなく、急激な上昇も必要に応じて行うのだろうと考えています。たとえば、繁殖地周辺で日暮れ前に浮いているウトウがしばしば観察されますが、これらはそのような急激な上昇をする個体かもしれません。

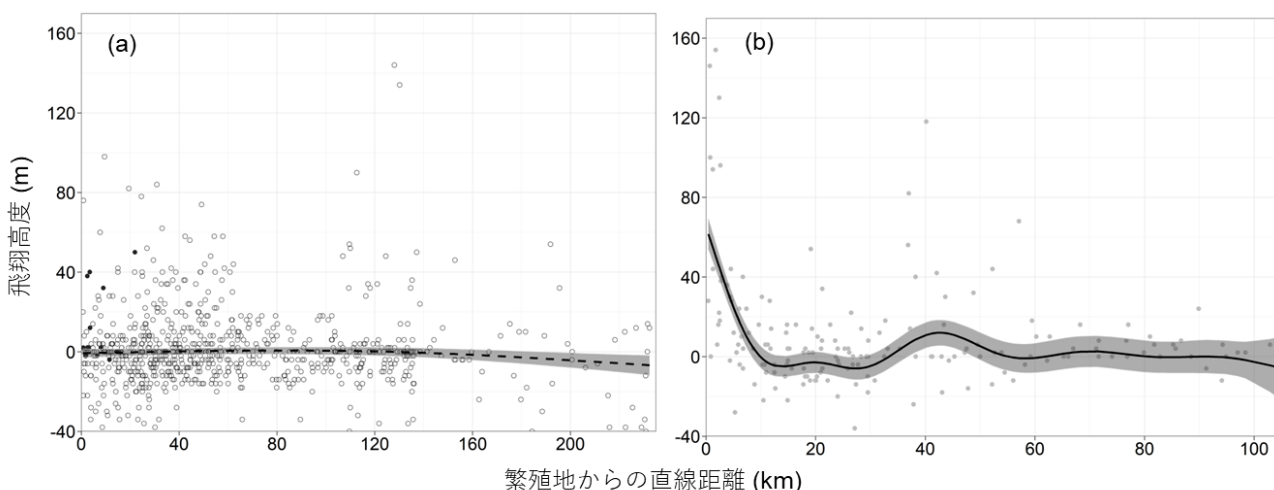


図 2. 飛翔高度と繁殖地からの直線距離の関係（a：トリップ中フェーズ，b：帰巢中フェーズ）。各プロットはGPS ロガーの測点。各パネルの線および影は統計モデルから予測された平均飛翔高度および標準誤差範囲（実線：統計的に有意，破線：統計的に非有意）。

「帰巢中」のウトウが高く飛ぶ範囲

ウトウが繁殖地周辺で飛翔高度を上昇させる範囲は、営巣場所の標高によって異なる可能性があります。北海道周辺の繁殖地でウトウが営巣する高度は、天売島では

10-180 m（環境省自然環境局生物多様性センター2017）、松前小島では 50-210 m（環境省自然環境局生物多様性センター 2017）、トド島では 10-44 m（長谷部・先崎 2016）、ユルリ・モユル

り島では 20–30 m (環境省自然環境局生物多様性センター 2018), 大黒島では 20–60 m (大門ら 2019) と幅があります。今回の研究では, 標高 120–130 m の場所で営巣するウトウを対象に研究を行いました, より低い場所に営巣する個体群では, 帰巣に必要な飛翔高度が小さいため, 飛翔高度を上昇させる範囲もより狭くなると考えられます (逆も然りです)。

最後に

本研究から, ウトウは帰巢中 (夕方から日暮れ時) の繁殖地周辺において風車への衝突リスクが高い高度 (20–140 m) を飛ぶ確率が高いこと, そのほかのトリップ中では基本的には海面付近を飛ぶことが示唆されました。ただし, あくまでざっくりとした傾向で, 細かな検証はできていません。今後は, 高度の推定精度が高い GPS ロガーで測位間隔を短くして追跡を行うことで, トリップ中に一時的に飛翔高度が高くなる確率, 風など環境条件と飛翔高度の関係, 帰巢中の具体的な飛翔高度上昇パターン, などの説明が期待されます。

謝辞

本稿でご紹介した論文は綿貫豊さんとの共著論文です。永谷奈央さん, 飯田映美さん, 島袋羽衣さん, 高橋晃周さん, 伊藤元裕さん, 菊地デイル万次郎さん, 西澤文吾さん, 庄子晶子さん, 風間健太郎さん, 三上かつらさん, 重石幸樹さんなど多くの方に調査へのご協力, 研究内容に関するご助言をいただきました。また, 本研究は環境研究総合推進費 (4-1803, 代表: 関島恒夫さん) の補助を受けて行われました。心より御礼申し上げます。

引用文献

- 長谷部 真・先崎理之 (2016) 礼文島における海鳥の繁殖記録。利尻研究 35: 25–29.
- Hedenstrom, A. & Alerstam, T. (1994). Optimal climbing flight in migrating birds: predictions and observations of knots and turnstones. *Animal Behaviour* 48: 47–54.
- Johnston, A., Cook, A.S.C.P., Wright, L.J., Humphreys, E.M. & Burton, N.H.K. (2014) Modelling flight heights of marine birds to more accurately assess collision risk with offshore wind turbines. *Journal of Applied Ecology* 51: 31–41.
- 環境省自然環境局生物多様性センター (2017) 平成 28 年度モニタリングサイト 1000 海鳥調査報告書。環境省, 東京。
- 大門純平・伊藤元裕・綿貫 豊 (2019) 北海道大黒島における海鳥の現状。山階鳥類学雑誌 51: 95–104.
- Okado, J. & Watanuki, Y. (印刷中) Flight altitudes of Rhinoceros Auklets rearing chicks measured by GPS logger. *Marine Ornithology*
- Sanzenbacher, P.M., Cooper, B.A., Plissner, J.H. & Bond, J. (2014) Intra-annual patterns in passage rates and flight altitudes of Marbled Murrelets *Brachyramphus marmoratus* at inland sites in northern California. *Marine Ornithology* 42: 169–174.

道東沖に晩夏を告げる
 ～分かってきたコシジロアジサシの
 出現状況～ 城石一徹

コシジロアジサシ *Onychoprion aleuticus* はサハリンやカムチャツカ半島などのロシア東部とアラスカ沿岸部で繁殖するアジサシ科の一種で、1980年後半までは非繁殖期の生態についてほとんど知られていなかったミステリアスな海鳥の一種です(写真1)。Rennerら(2015)によれば、繁殖地における個体数はアラスカで111コロニー-5,529羽、ロシアでは89コロニー-25,602羽と推定されています。本種が渡るのかどうかや、渡るのならどこで越冬するのかについては長らく解明されていませんでした。しかし、2010年にアラスカのコシジロアジサシ114羽へジオロケータを装着し追跡したところ、6羽の主要な越冬地がタイやフィリピン、インドネシア、パプアニューギニア周辺の海域

であることが判明しました。このことから、アラスカで繁殖するコシジロアジサシは、越冬地である東南アジアに向けて片道16,000 km以上の渡りを行っていることが明らかになりました(Goldstein et al. 2019)。



写真1 漂流物上で休息するコシジロアジサシ(厚内沖, 2022年8月11日)
 Fig.1 An Aleutian Tern resting on the floating object off the coast of Atsunai on 11 Aug. 2022.



写真2 流れ藻上で休息するコシジロアジサシ(厚内沖, 2015年9月1日)
 Fig. 2 Aleutian Terns resting on the drifting seaweed off the coast of Atsunai on 1 Sep. 2015.

北の海鳥 16号 2023年3月

表1 北海道東部（十勝・釧路・根室・オホーツク）におけるコシジロアジサシの記録

Table 1 The records of Aleutian Tern *Onychoprion aleuticus* around Eastern Hokkaido, Japan.

| No. | 日付 Date | 観察地 Region | 全数 Total | 成鳥 Ad. | 幼鳥 Juv. | 行動（飛翔、水面、 ダイビング） Flight/Surface /Diving | 参考文献 Reference | |
|-----|-----------------|---------------|----------------------------|-----------|------------|--|-------------------|----------------------------------|
| 1 | 1980/8 | Nemuro | Shunkunitai | 2 | 1 | 1 | | 北海道東部鳥類目録（2010） |
| 2 | 1990/8 | Nemuro | - | 1 | | | | 北海道鳥類目録・改訂4版 |
| 3 | 2006/10 | Hamanaka | Poroto Swanp | 1 | - | - | | 北海道東部鳥類目録（2010） |
| 4 | 2007/8 | Mombetsu | Omusaro | 1 | | | | 北海道鳥類目録・改訂4版 補遺 |
| 5 | 2009/9/9 | Rausu | Off the coast of Rausu | 1 | 1 | | F | eBird checklist |
| 6 | 2010/8/18 | Akkeshi | Off the coast of Akkeshi | 2 | 1 | 1 | S | NPO法人エトピリカ基金, 2013 |
| 7 | 2010/8/28 | Nemuro | Off the coast of Ochi-ishi | 2 | 1 | 1 | F | NPO法人エトピリカ基金, 2013 |
| 8 | 2011/8/20 | Hamanaka | Off the coast of Kiritappu | 3 | 3 | | F, S | NPO法人エトピリカ基金, 2013 |
| 9 | 2011/8/25 | Urahoro | Off the coast of Atsunai | 1 | 1 | | F | website:【鳥キチ日記】2011年に十勝に飛来した珍鳥たち |
| 10 | 2012/8/21 | Hamanaka | Off the coast of Kiritappu | 3 | 2 | 1 | S | NPO法人エトピリカ基金, 2012 |
| 11 | 2012or2013/8/25 | Abashiri | Off the coast of Abashiri | 1 | 1 | | | 宇仁ら, 2014. 知床博物館研究報告 36 |
| 12 | 2013/8/24 | Urahoro | Off the coast of Atsunai | 3 | 3 | | F | website:【鳥キチ日記】130824 十勝沖海鳥・海獣調査 |
| 13 | 2013/8/24 | Urahoro | Off the coast of Atsunai | 1 | 1 | | F | NPO法人エトピリカ基金, 2013 |
| 14 | 2013/8/26 | Hamanaka | Off the coast of Kiritappu | 2 | 2 | | F | NPO法人エトピリカ基金, 2013 |
| 15 | 2013/8/5 | Hamanaka | Off the coast of Kiritappu | 2 | 1 | 1 | F | NPO法人エトピリカ基金, 2013 |
| 16 | 2013/8/8 | Abashiri | Off the coast of Abashiri | 2 | 1 | 1 | S | 日本野鳥の会オホーツク支部ブログ |
| 17 | 2014/8/28 | Urahoro | Off the coast of Atsunai | 3 | 3 | | | 浦幌鳥類目録第3版（2020） |
| 18 | 2014/9/6 | Urahoro | Off the coast of Atsunai | 3 | 2 | 1 | | 浦幌鳥類目録第3版（2020） |
| 19 | 2015/8/26 | Abashiri | Off the coast of Abashiri | 6 | 5 | 1 | F | 日本野鳥の会オホーツク支部ブログ |
| 20 | 2015/8/31 | Abashiri | Off the coast of Abashiri | 4 | 2 | 2 | F | 日本野鳥の会オホーツク支部ブログ |
| 21 | 2015/8/8 | Urahoro | Off the coast of Atsunai | 3 | 3 | | F, S | website:【鳥キチ日記】150808 十勝沖海鳥・海獣調査 |
| 22 | 2015/9/1 | Urahoro | Off the coast of Atsunai | 10 | 7 | 3 | S | 北海道の海鳥5 |
| 23 | 2016/8/27 | Abashiri | Off the coast of Abashiri | 2 | 2 | | F | 日本野鳥の会オホーツク支部ブログ |
| 24 | 2017/8/20 | Mombetsu | Lake Komuke | 1 | 1 | | F | 日本野鳥の会オホーツク支部ブログ |
| 25 | 2020/7/26 | Abashiri | Off the coast of Abashiri | 1 | 1 | | F | 城石 未発表 |
| 26 | 2021/8/7 | Abashiri | Off the coast of Abashiri | 2 | 2 | | F, D | 城石 未発表 |
| 27 | 2022/7/25 | Rausu | Off the coast of Rausu | 1 | | | S | eBird checklist |
| 28 | 2022/8/11 | Urahoro | Off the coast of Atsunai | 2 | 2 | | F, S | 城石 未発表 |
| 29 | 2022/8/20 | Abashiri | Off the coast of Abashiri | 9 | 7 | 2 | F, S, D | 城石 未発表 |

そんな謎多き海鳥であるコシジロアジサシに私が初めて出会ったのは、2015年9月1日の十勝沖でした。この日、幸運にも流れ藻などから成る漂流物上で羽を休めている10羽ものコシジロアジサシの群れに遭遇しました。10羽のうち7羽は成鳥で、3羽は幼鳥でした（写真2）。十勝管内における本種の記録状況が判然としない当時の私を前に、雄叫びをあげていた亡き千嶋さん（当時の十勝沖海上調査を牽引）の様子は今も鮮明に記憶しており、また、十勝沖での調査の先陣を切ってきた彼にとっては筆舌に尽くし難い感動であったのだろうと今にして思います。十勝管内における本種の初記録は2011年とされており、また浦幌町・厚内沖における海上調査以外の十勝管内におけるそのほかの記録はあまり知られていません。また、十勝沖以外の道東沿岸域における本種の記録についてもまだ情報不足であることは否めませんが、少なくとも2010年頃から道東地域の熱意ある鳥屋たちによって、道東太平洋沿岸部やオホーツク海沿岸部で徐々に情報が蓄積されてきました。

そこで、北海道東部（十勝・釧路・根室・オホーツク）におけるコシジロアジサシの観察記録について、私個人の記録を含め収集可能な範囲で表1にまとめてみました。その結果、7月下旬に2件2羽、8月に23件58羽、9月上旬に3件14羽、10月に1件1羽もの記録が収集できました。本種の繁殖地からの渡りの開始時期については情報が多くありませんが、7月下旬～10月上旬は繁殖後の渡り時期に当たるため、これらの多くは繁殖地から越冬地に向けて南下している個体であろうと思われます。日本国内に焦点を広げてみると、eBirdなどのネット上の情報では、八丈島航路や三浦半島沖など日本近海においては5～6月の記録も散見されます。また、太

平洋側に限らず、日本海側の記録（例えば遠別川河口や酒田～飛島航路上など）でも春季の記録がありますが、私が知る限りでは北海道東部ではまだ春季には記録されていません。Goldsteinら（2019）の追跡調査によって、コシジロアジサシが南下する際にはおおまかに北海道近海から日本海側へと抜けるルートと、北上時は太平洋側の沖合を抜けるルートが見出されたことから、春の北海道東部沿岸は本種の主要な渡りルートではないのかもしれませんが。



写真3 成鳥(右)と幼鳥（網走沖，2022年8月20日）

Fig.3 Adult(right) and Juvenile birds off the coast of Abashiri on 20 Aug. 2022.

本種が一度に確認される個体数はほとんどが単独か数羽であるようですが、前述のとおり、十勝沖でも10羽の群れの記録があり、室蘭沖では2017年9月に27羽の記録があるなど、条件によっては日本周辺でもまとまった数が見られているようです。また、本種の数少ない国内の観察記録でも興味深い点として、秋の渡り時には成鳥と幼鳥が連れ立って観察されていることが挙げられます。北海道の海鳥5（千嶋2018）にも道東で観察された18例の記録のうち、6例で成鳥と幼鳥と一緒に観察されており、2022年8月20日にも網走沖で同様の風景が2度観察されました（写

真 3). また, この日は感覚的に海上の流木が多かった日で, 恐らく同年8月16日の大雨(網走市で日雨量 66mm, 北見市端野で 58mm を観測)で河川の増水によって多くの流木が発生していたのかもしれませんが, こうした条件が沿岸部を移動する本種や他のアジサシ類の長旅の一時的な休息場となっている可能性があり, 今後も注目していきたいところです. 加えて, 2021年8月7日と2022年8月20日には水中へダイビングする探餌行動が見られました. 餌資源については残念ながら確認できませんでしたので, 網走沖を通過するコシジロアジサシが何を食べているのかについて今後観察してみたいと考えています.

コシジロアジサシに関する調査研究は, 世界的にも始まったばかりだと思われませんが, Renner ら (2015) によると, すでにアラスカにおける本種の個体数は 1960年代から 93%減少したと推測されています. この減少の原因の一つには, 良質な餌の不足が挙げられています (Tengeres 2022). 1970年代後半にアラスカ周辺の海域で発生したレジームシフトや, 近年の海洋熱波などが, 北太平洋沿岸部に生息する海鳥の餌資源量に大きな影響を及ぼしていることが明らかとなっています (Anderson & Piatt 1999, Tate et al. 2021). 近年, 巷ではコシジロアジサシに限らず日本へ渡来する海鳥たちの減少がささやかれています. これらは上記のような環境変化と必ずしも無関係ではないと推測しています.

地球規模で変化する海洋生態系を前に私個人が成す術はありませんが, 今後も細く

長く彼らの記録を残し続けていければと思っています.

参考文献

- Anderson PJ, Piatt JF. 1999. Community reorganization in the Gulf of Alaska following ocean climate regime shift. *Marine Ecology Progress Series*, Vol.189: 117-123.
- 千嶋淳. 2018. 北海道の海鳥 5. 池田町.
- Goldstein MI, Duffy DC, Oehlers S, Catterson N, Frederick J & Pyare S. 2019. Interseasonal Movements and Non-Breeding Locations of Aleutian Terns *Onychoprion Aleuticus*. *Marine Ornithology* 47: 67-76.
- Renner HM, Romano MD, Renner M, Pyare S, Goldstein, MI & Arthukin Y. 2015. Assessing the Breeding Distribution and Population Trends of the Aleutian Tern *Onychoprion Aleuticus*. *Marine Ornithology* 43: 179-187.
- Tate HM, Studholme KR, Domalik AD & Drever MC. 2021. Interannual measures of nutritional stress during a marine heatwave (the Blob) differ between two North Pacific seabird species. *Conservation Physiology*, Vol.9.
- Tengeres JE. 2022. The Breeding Ecology and Foraging Niche of Aleutian Terns (*Onychoprion aleuticus*) in the Kodiak Archipelago, Alaska. Oregon State University.

3. 海鳥情報

釧路市における海鳥類の観察記録③ カモメ類

当会広報 矢萩 樹

はじめに

筆者は、大学在学中の2013～2017年までの間を釧路市で過ごし、市内の各所で海鳥を観察しました。前号までに、海ガモ類～ヒレアシシギ類の観察記録を報告しました。本稿では、前号までの続編として、カモメ類の観察記録をまとめたいと思います。

なお、カモメ類の分類には諸説ありますが、本稿における分類は「日本のカモメ識

別図鑑（氏原・氏原 2019）」を基準とし、和名は国内で最も普及していると思われるものを用いました。

観察記録

2013年～2017年までの観察で11種のカモメ類が記録されました（表1，図1）。観察種のうち、繁殖が記録された種はオオセグロカモメのみで、多くの種は渡りや越冬のために渡来していると考えられます。北海道で繁殖するウミネコについては、繁殖期にも記録があることから、釧路市沿岸は浜中町などの他地域で繁殖する個体群の採餌海域として利用されている可能性も考えられます。

表 1. 釧路市における海鳥類の月別の観察記録（2013～2017年）

| 種名 | 月 | | | | | | | | | | | |
|--|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| ミツユビカモメ <i>Rissa tridactyla</i> | | | | | | | | | | ● | ● | ● |
| アカアシミツユビカモメ <i>R. brevirostris</i> | | | | | | | | | | | ● | ● |
| ユリカモメ <i>Larus ridibundus</i> | ● | ● | ● | ● | ● | | | | ● | ● | ● | ● |
| ウミネコ <i>L. crassirostris</i> | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● |
| カモメ <i>L. canus</i> | ● | ● | ● | ● | ● | | | | ● | ● | ● | ● |
| ワシカモメ <i>L. glaucescens</i> | ● | ● | ● | ● | ● | | | ● | ● | ● | ● | ● |
| シロカモメ <i>L. hyperboreus</i> | ● | ● | ● | ● | | | | | ● | ● | ● | ● |
| アイスランドカモメ (亜種カナダカモメ) <i>L. glaucooides thayeri</i> | | | ● | | | | | | | | ● | ● |
| セグロカモメ <i>L. vegae</i> | ● | ● | ● | ● | ● | | | ● | ● | ● | ● | ● |
| オオセグロカモメ <i>L. schistisagus</i> | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● |
| “タイミルセグロカモメ” <i>L. fuscus heuglini</i> × <i>L. v. vegae</i> | | | | | | | | | ● | ● | ● | |
| 計11種 | 7種 | 7種 | 8種 | 7種 | 6種 | 2種 | 2種 | 4種 | 7種 | 9種 | 11種 | 9種 |

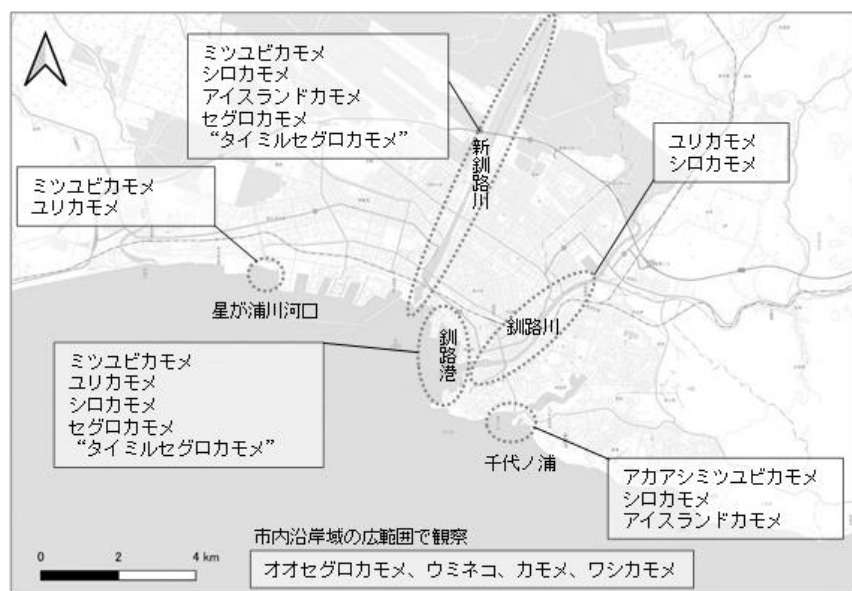


図 1. 観察種的主要な確認場所

①ミツユビカモメ *Rissa tridactyla*

主に秋季に釧路港や新釧路川河口、星が浦川河口などで観察されました。秋季における個体数は多く、数百個体の群れで見られることもありましたが、釧路港では、強風時に港の内部に入ることもありましたが、穏やかな日には離岸堤や沖に突き出した防波堤で観察されました。



ミツユビカモメ成鳥 (2014/11/3 釧路港)



ミツユビカモメ幼鳥 (2014/11/20 釧路港)

②アカアシミツユビカモメ
R. brevirostris

2013年11月に千代ノ浦漁港で成鳥1個体が観察されました。観察個体は、ミツユビカモメとユリカモメの群中で見られました。

③ユリカモメ *Larus ridibundus*

秋季から春季にかけて釧路川や釧路港、星が浦川などで観察されました。春の渡り時期では、4月下旬から5月中旬に渡り移動中と思われる50-100羽以上の群れが見られました。この際、成鳥だけでなく幼

鳥の群れも観察されました。



ユリカモメ成鳥 (2015/4/28 星が浦川河口)



ユリカモメ幼鳥 (2015/5/17 釧路港)

④ウミネコ *L. crassirostris*

一年を通じて市内沿岸域の各所で観察されましたが、厳冬期には個体数が少ない傾向がみられました。晩夏～秋季にかけて個体数が増加しましたが、これは繁殖を終えた個体が、道東だけでなく本州からも渡来するためだと考えられます。実際に、2014年9月には青森県で放鳥された標識個体が観察されました。また、当年生まれの幼鳥は道東の繁殖地で雛が巣立つ前の時期にあたる7月上中旬から観察されました。



ウミネコ標識個体 (2014/9/19 千代ノ浦)



ウミネコ幼鳥 (2014/11/9 釧路港)



推定亜種ニシペリアカモメ幼鳥
(2017/1/14 釧路港)

⑤カモメ *L. canus*

秋季から春季にかけて市内沿岸域の各所で観察されました。河川沿いに内陸部へ達することも稀ではなく、特にシシャモの遡上時期には、新釧路川で大きな群れが観察されました。観察される多くの個体は亜種カモメと考えられますが、亜種ニシペリアカモメおよび亜種コカモメと思われる個体も観察されました。



推定亜種コカモメ幼鳥
(2014/12/6 釧路港)



カモメの群れ (2015/11/30 新釧路川)



亜種カモメ (2015/4/28 釧路港)

⑥ワシカモメ *L. glaucescens*

秋季から春季にかけて市内沿岸域の各所で観察されました。大型カモメ類の種では、厳冬期の個体数がオオセグロカモメに次いで多い傾向にありました。2015年3月9日には、建物の屋上でオオセグロカモメとともに縄張りを誇示する行動をとる個体が観察されましたが、その後に繁殖が確認されることはありませんでした。



ワシカモメ成鳥 (2015/12/20 釧路港)



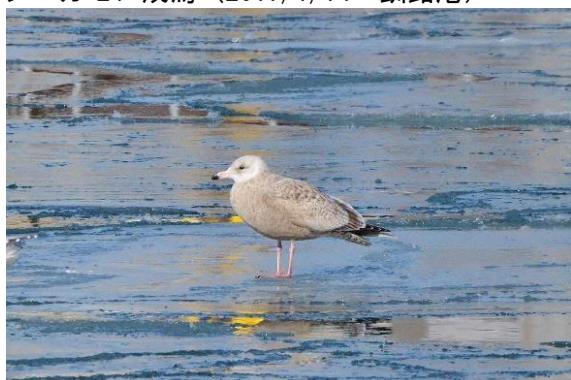
オオセグロカモメとともに誇示行動するワシカモメ成鳥 (2015/3/9 釧路港)

⑦シロカモメ *L. hyperboreus*

秋季から春季にかけて新釧路川や釧路港、千代ノ浦などで観察されました。厳冬期には個体数も多く、この時期には普通な種でした。セグロカモメとの交雑と思われる個体も記録されました。



シロカモメ成鳥 (2017/1/14 釧路港)



推定シロカモメ×セグロカモメ幼鳥 (2017/1/14 釧路港)

⑧アイスランドカモメ *L. glaucoides*

亜種カナダカモメ *L. g. thayeri* が秋季から春季に新釧路川および千代ノ浦で観察されました。個体数は少なく、いずれの記録もセグロカモメなど他の大型カモメ類の群

中に単独で観察されました。



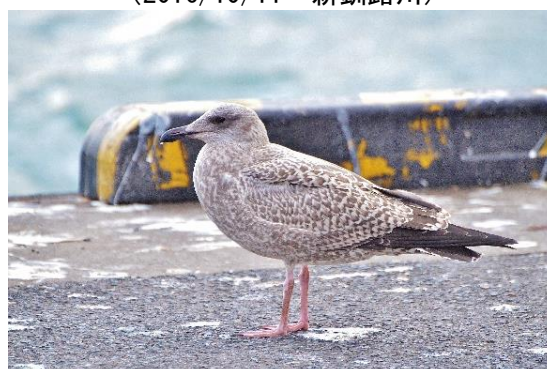
亜種カナダカモメ幼鳥 (2016/3/22 新釧路川)

⑨セグロカモメ *L. vegae*

秋季から春季にかけて新釧路川や釧路港で観察されました。個体数は秋季に多く、局所的に数千個体の群れが観察されることもありましたが、厳冬期の個体数は少ないため、多くは渡りによる通過個体であったと思われます。また、春季は秋季に比べて個体数が少なく、秋季と渡りルートが異なることが推察されました。



セグロカモメを主とするカモメ類の群れ (2016/10/11 新釧路川)



セグロカモメ幼鳥 (2014/12/16 釧路港)

⑩オオセグロカモメ *L. schistisagus*

一年を通じて市内沿岸域の各所で観察されました。どの時期にも個体数が多く目立つため、市民にも馴染みのある鳥の一種です。市内で繁殖する数少ない海鳥類の一種でもあり、2015年の調査では港湾地域を中心に釧路市内で931 巣が記録されました(矢萩 2016)。



建物の屋上で営巣するオオセグロカモメ
(2015/6/4 釧路港)



海岸の崖で営巣するオオセグロカモメ
(2014/6/22 益浦)

⑪ “タイミルセグロカモメ” *L. fuscus heuglini* × *L. Vegae vegae*

タイミルセグロカモメは正式な亜種和名ではないため、氏原・氏原(2019)にならない、“タイミルセグロカモメ”としました。

“タイミルセグロカモメ”は、秋季に釧

路港や新釧路川で観察されました。主にセグロカモメの群中で見られました。個体数はセグロカモメの個体数の多寡と連動している印象でした。



“タイミルセグロカモメ”成鳥
(2014/9/30 釧路港)

まとめ

カモメ類は類似種が多いことや、齢により羽衣が異なるため、種や齢の識別にロマンを感じられる分類群だと思います。本稿を執筆するにあたり、当時の写真やノートの記録を基に、最新の図鑑や文献を睨んだ時間は、非常に有意義なものとなりました。

次回は、釧路市での海鳥類観察記録の最終回として、アジサシ類～ウミスズメ類の記録をまとめたいと思います。

引用文献

氏原巨雄・氏原道昭(2019)日本のカモメ識別図鑑。誠文堂新光社、東京。

矢萩樹(2016)釧路市におけるオオセグロカモメの営巣状況。北の海鳥 2: 18-23.

・会報誌『北の海鳥』

今回は早稲田大学の風間研究室の学生である大槻さんから枝幸町目梨泊のウミネコ繁殖地の捕食者対策の記事を書いてもらいました。風間研究室は網走で開催された鳥学会にも参加し多くの発表をしていました。

長谷部からはサロベツのカワウ繁殖地の報告でした。ドローンの登場により海鳥調査の可能性の幅が広がりました。

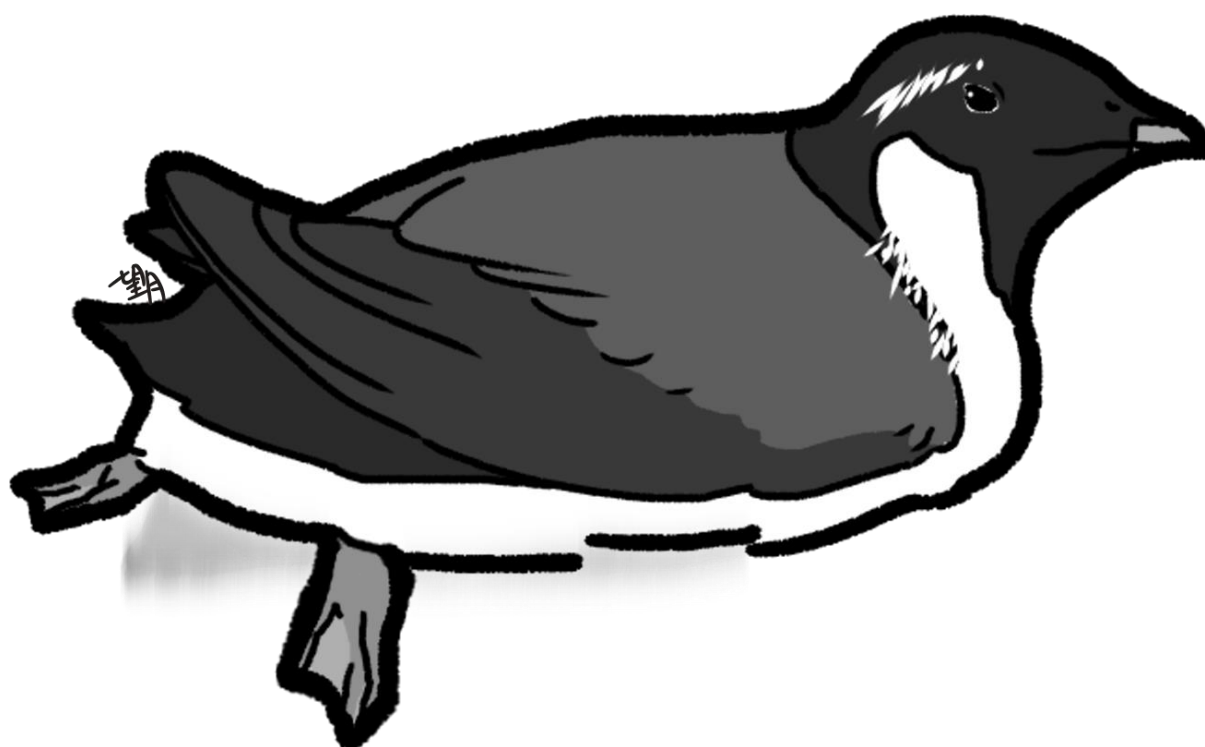
城石さんからは十勝クルーズによるコシジロアジサシの話でした。自分も何年か前に猿払で同種の調査機会があったのですが、時期を見誤り実施できなかったことを思い出しました。

当研究会発足当初から礼文島で研究を続けていた大門さんからはGPSを使ったウトウの飛翔高度に関する投稿がありました。6-7月のサロベツ沿岸でも早朝に移動中のウトウを見かけることがあります。

矢萩さんからは連載中の「釧路の海鳥」から今回はカモメ類の話でした。釧路周辺で多くの種類のカモメが観察されていることがわかりました。これらの連載も次号で最後だそうです。

会報誌の次号は2023年の9月頃に発行する予定です。新しい方からの記事を募集しています。ご連絡は長谷部までお願いします。

hasebemakoto@hotmail.com



ウミスズメ (イラスト：望月寧那)